

## 「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による  
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第37回:中国共産党大会が意味する「5つのこと」

2022年11月10日配信

### 【ポイント】

- 10月16日～22日第20回中国共産党大会では「異例の」習近平三期目入りが「予定通り」決定  
⇒ 習近平一強の確立
- 以下を踏まえれば、習近平に直に繋がるコミュニケーション・ルート確立が今まで以上に必須  
= 11月15日～16日のインドネシアG20会合が習との首脳会談の一つの機会

### 【本文】

1. 陣容は習近平一強+後任の顔が見えず=集団指導と決別+四期目も視野
  - ・政治局常務委員(チャイナ7(含む習自身)=4人新任(全員習派)
    - \* 6名中5名が習派。残る1名;王滬寧は、規定方針を忠実に「理論化」する役回り
    - \* 全員習が引き上げた後輩+60歳以上=後を狙わない忠実家臣集団
  - ・政務局員(チャイナ7+17名=24名)=17名中13名新任、留任4名は全員習派
    - \* 17名中13名習派。残る4名は能力ベースの忠実なテクノクラート(外交、公衆衛生、原子力行政、情報機関)
    - \* 2人を除き習の後輩⇔張又俠(72)は父同志と同様の旧友で最も信頼する相手
    - \* 日本経験の王毅(69)は「良い人」だが無力。「戦狼外交」を演じている
  - ・首相候補の李強は副の経験も無い抜擢
    - \* 浙江省時代の「秘書役」=首相ポストは「秘書役」化;完全な実施者≠後継者
2. 胡錦濤の「芝居」はさておき、対立勢力(共青团)の完全駆逐は完成⇔党規約を巡る第二幕も
  - ・外国プレスを入れた後の胡錦濤退場劇の真相は最後まで闇
    - \* 体調悪化か、不満を示す芝居か。どちらにしても今後胡は表舞台から消える
    - \* いずれにしても、実質的に全てが決まった後(だから外国プレスを入れた)
  - ・今回胡子飼いの李国強、故春華が政務局員からも外れたことで共青团外しは完結
    - \* 既に5年前に共青团のエース李源潮、劉奇葆が67歳前に政務局員から外れた
    - \* 胡錦濤の影響力はその時点で既に相当失墜
  - ・習近平の考え方=特権意識・エリート主義を示すものとしても興味深い
    - \* 習近平=太子党=国のオーナーとしての「血筋」重視=皇帝に通じるもの
    - \* 胡錦濤=共青团=共産党若手エリート養成所出身者=習にとってはテクノクラート

- ・一方、党規約改正を巡っては「鄧小平越え」「実質的個人崇拜」は叶わず＝5年後に第二幕も
  - \* 「二つの維持」は入る＝核心(習のみではない)の地位を守り、集中統一指導を守る
  - \* 「二つの確立」は入らず＝「習近平思想」の確立と「鄧小平理論」越え＝個人崇拜は未達
  - \* 人事では完璧な結果だが、党規約を巡って今後も暗闘が続く
  
- 3. 今後は陣営内輪の忠誠心競争が激化＋「間違い」は正せない
  - ・習一強＋政務局員の殆ど全てが子飼いの子分＋自分ですべてできない＝？
    - \* 子飼いの間で忠誠心を競争させる＝一定の派閥争いが生じる可能性
    - \* 皇帝の統治手法と似通う
  - ・実際、政治局員内には幾つかの派閥が存在＋特定派閥が突出しないよう配慮  
(以下、出典は日経新聞)
    - ①赴任先閥1；浙江閥＝李強(次期首相予定)、陳敏爾(重慶党委書記)
    - ②赴任先閥2；福建閥＝何立峰(国家発展改革委主任)、何衛東(人民解放軍東部戦区指令)
    - ③赴任先閥3；1＋2＝蔡奇(中央政治局常務委員)、黄坤明(広東州党委書記)
    - ④赴任先閥4；上海閥＝丁薛祥(中央弁公庁主任)
    - ⑤精華大・中央党校閥＝陳吉寧(上海市党委書記)＝習⇒李強に繋がる有望注目株  
李書磊(中央宣伝部部長；新スピーチライター？)
    - ⑥陝西省・父親閥；張又俠(中央軍事委副主席、統投)、趙樂際・李希 両常務委員
  - ・一方、問題は、トップの「間違い」は修正できないこと＋間違いの責任がトップに及び得る
    - \* ゼロ・コロナ政策も当面継続する以外選択肢無し
    - \* これが今後の政策運営に際して大きな足かせになる可能性
  
- 4. 政治が経済の上に来ることが明確に＝ここがボトルネックになるか？
  - ・政治・安全は「根本」⇔ 経済は「基礎」⇒ 政治≥経済
    - \* 党大会中のGDP統計発表延期が典型＝「市場」の反応は気にしない
    - \* ゼロ・コロナ政策も当面変えない
  - ・経済実務家・専門家外し＋新陣営の能力未知数＝市場は厳しく反応
    - \* いわゆる「改革派」(易綱(人民銀行総裁)、郭樹清(中国銀行保険監督管理委主席))の引退は、  
市場に改革に後ろ向きのメッセージと捉えられた
    - \* 李強、何立峰(劉鶴副首相後任候補)の力量は未知数
    - \* 党大会後対ドルで一旦持ち直した人民元は、その後再び弱含みで推移
  - ・習近平の経済政策は「共同富裕」＝抽象的＋政治優先＋統制経済＝いずれ行き詰まる？
    - \* 経済のパイの拡大・雇用拡大といった配慮無し
    - \* 競争より平等＝民間の自由な経済活動は共同富裕実現にとり脅威＝介入・取り締まり
    - \* 市場の反応への配慮欠如が、いずれ自らに跳ね返ってくる可能性

## 5. 台湾危機への影響は未知数＝年齢と焦りが不確定要素

- ・「台湾シフト」が指摘されるが、実際の影響は未知数
  - \* 何衛東(福建省・台湾所管元軍司令員)を新たに政治局委員・中央軍事委員会委員に抜擢
  - \* 中央軍事委政治工作部主任に留任した苗華(福建省出身)と共に、台湾シフトと受け止め
  - \* 党規約に「台湾独立に断固として反対し、抑え込む」+「世界一流の軍隊建設」と記載
  - \* ただ、ペロシ米下院議長訪台直後に「急遽」発表された「台湾白書」を越えるものは無い
- ・一方、客観情勢不変+習一強で、より失敗できなくなった可能性も⇒抑止強化の重要性不変
  - \* 共産党一党支配正統性の究極的根拠＝決してあきらめられない
  - \* 同時に、決して失敗できない＝失敗は共産党の崩壊につながりうる
  - \* 失敗のリスクを感じさせることで抑止できる余地があるはず
- ・不確定要素は、習近平の年齢からくる焦り
  - \* 一強+長期政権＝リスクを冷静に計算する余裕がある程度あるはず
  - \* 但し、3期目終わりには74歳(4期目79歳(今の胡錦濤と同年齢))+台湾人のアイデンティティ強化＝時は中国に味方していない。これが焦りを生む可能性は常に有る

(以上)

りそな総合研究所 顧問 石井正文

問い合わせ先:りそな総合研究所 アジア室 石橋修三

メールアドレス: shuzo.a.ishibashi@rri.co.jp